

調教開始

調教開始

「SM・調教」

[提供：NAN-NET](#)

調教開始

調教開始

調
教
開
始

結衣は中学生の頃から痴漢にあうことを喜んでいました。わざと混み合う車両を選んだり、スカートを短くしたり。初めて彼氏が出来て初体験を迎えても、普通のHではもの足りなさを感じていました。

二十歳になる頃、彼氏がいなかったこともあり、チャットでSの人に命令してもらったりし、自分が完全にMだということを確信しました。

ある時チャットで「リアルでしたことはないのですが、調教してください」とメッセージを入れて場所も書き込むと少しして隆様が入室してきました。

チャットでしばらく話しをしたあと、次の週末に待ち合わせる約束をしました。待ち合わせの時は下着を着けることは許されず、ミニスカートとブーツを履くように最初の命令をされました。

待ち合わせ場所には車で迎えに来てくださり、助手席に座るとスカートを捲った状態でシートベルトをつけました。パンツを履いていないので黒い毛が丸見えになりました。まだ明るいのにそんなことをするのは初めてだったので、恥ずかしくなりバツ

クで隠そうとしたら隆様に「隠すのか？」と言われバツクを後部座席に置かれてしまいました。「脚を開け」ただそれだけ言つと車を発進させてどこかへと向かいました。そんな長い時間ではなかつたけど、信号待ちの時に外から見えるんじゃないか、と思うだけで結衣の身体は熱くなっていきました。無言のままホテルに到着し、部屋へと向かいました。

部屋に入るとすぐ「脱げ」と短く言われ、言われるとおり、すぐに裸になると「これから調教するかの子エックをするから、ベッドに仰向けに寝ろ」

もちろんすぐに言われたとおりになります。「まずはオナニーしてみせろ」といきなり言われ、戸惑いながらもおっぱいに手を持っていきました。もう乳首が硬くなつて

いて、ゆっくりとおっぱいをもみはじめました。左手でもみ、右手はオマンコに手を伸ばしました。ゆっくり脚を開いて、オマンコに触れると、もうすでにクチュクチュに濡れていました。

クリをゆっくり円を描くように触ると、ぴちゃぴちゃイヤらしい音がします。だんだん速く、強く…クリだけでなく、指を2本入れて親指でクリを刺激すると、もう我慢できず、大きな声を上げながらあつという間にイッてしまいました。

荒い息を落ち着かせて、「すぐにイッてしまい、すみません」と謝ると、「合格」とニヤリとしながら言われました。

「今日は最初だから、そんなにハードなことはしないよ」と目隠しをしロープで結衣の手足を縛りました。「イヤらしいオマンコだ。どんどんオツユが溢れてる。栓が必要だな」と言い終わるとすぐに固くて冷たいバイブがオマンコに入れられました。さつきオナニーでイッたばかりのオマンコは、簡単に受け入れ、バイブのスイッチが入ると結衣の腰は勝手に動き出しました。

「今日初めて会った男にオマンコ見られて、オナニーしてバイブ入れられて喜ぶなんて、結衣は淫乱な女だな。この変態」そう言うとバイブを激しく出し入れし始めました。「おつ潮まで吹いて。どこが気持ちいいのか言ってみる」

「オマンコです」「誰のどんなオマンコか言えないのか?」「結衣のイヤらしいオマンコにバイブが入っていて気持ちいいです」「よし、いい子だ」と言われ、バイブで突かれながらクリを強く摘まれてまたすぐにイッて気を失ってしまいました。

目が覚めるとロープは解かれ、目隠しも外されていました。「あんまり早くイッてしまったので、もう終わりですか?」と聞くと、「まさか、まだこれからだよ」とお風呂場に連れていかれました。浴槽の淵に脚を開いて座ると、「今から剃るから動く

と危ないよ」と陰毛を綺麗に剃り落としました。ツルツルになったオマンコを見て
るだけでまた濡れてくるのがわかりました

ベッドに戻るとクリにローターをテープで固定し、さっきよりも太いバイブをオマン
コに挿入してテープで固定しました。その状態で大きな鏡の前に行き、またロープ
で手足を拘束されました。今まで見たことのない自分のイヤらしい姿を見ると、また
興奮してまだスイツチが入っていないのに、気持ちよくなっ てきました。「まだま
だ始まったばかりだからね」

初日の調教はまだまだこれから…。

結衣は大きな鏡の前で大きく脚を開き、クリにはローター、オマンコにはバイブを固定された状態の自分の姿を恥ずかしながらも興奮していた。

「じゃあスイッチ入れてあげるから、ちゃんと自分の姿を見ているんだよ」と言い終わるか終わらないうちに、ローターとバイブのスイッチが入りました。

「んっ……」

思わず目を閉じそうになるけど隆様の言葉どおり、結衣は自分のオマンコを掻き回されるのを見ていました。グチュツグチュツという卑猥な音が余計に興奮して、白く泡立ったようなオツユが溢れ出てきます。

「あぁっ…はぁっ…」我慢出来ずため息まじりに声を出すと「ん？どうした？もう2回もイッてるのに、また気持ちよくなってるのか？淫乱な結衣は」とソファアに座っている隆様に声をかけられました。

「…はい。結衣は淫乱なので…あぁっ…気持ちいいです」

「それだけか？言うことは」

「結衣の淫乱な…あぁっ…オマンコに太いバイブが…入っていて…あっ…グチヨグチヨになって…自分でそれを見て…隆様に見ていただいて…あぁっ…気持ちいい

です…」

「そんなに気持ちいいのか？いつでもイッていいけど、イッてもやめないよ」

もう結衣の身体は快樂の波に溺れていました。何度も目を閉じそうになりながらも、必死に鏡の中の姿を見ていると、身動きとりずらいながらも無意識に自ら腰を動かしていました。

その時、結衣のオマンコからピュツと潮が吹き出したかと思うと、潮というよりおもらしに近いぐらいに吹き出してきました。

「鏡を汚しちゃって結衣は悪い子だな。おしおきだ」そう言ってローターとバイブのスイッチを切られてしまいました。

「いやあ…やめないください」

そう結衣が懇願してもスイッチは入れてもらえず、ロープも解かれてしまいました。

「お願いします。スイッチを入れて、結衣のオマンコを掻き回してください」

再びお願いすると、目の前に隆様の大きくて太くそり立ったオチンチンがありました。何も言われる前に膝立ちになりオチンチンを口に含み、ペロペロジュボジュボ舐めました。

「美味しいです。隆様のオチンチン…」そう言いながら舐め続けると、不意にスイツチが入りました。「ああっ…」思わずオチンチンを口から離すと「舐めないとスイツチ切るよ」と言われ、一心不乱に舐め続け、オチンチンを口に含んだままイッてしまいました。イッてもスイツチは入ったままで、もう訳も分からず腰を振りながらオチンチンを舐め続けました。

太ももだけではなく、膝のあたりまで結衣のイヤらしいオツユで濡れています。結衣が濡れすぎたせいでローターとバイブを固定していたテープが剥がれてしまい、ゴトつという音がしてバイブが抜け落ちてしまいました。

「バイブとオチンチンどっちがほしい？」

そう聞かれて迷わず「隆様のオチンチンを結衣のイヤらしいオマンコに入れてください」とお願いしました。

「いい子だ」とベッドに行き、隆様の大きくて太くて固いオチンチンを四つん這いになった結衣のオマンコに入れてもらえました。

激しく後ろから突かれると、また結衣はイキそうになりました。

「イクツイクウ…またイツちゃうう…」そう叫びながら身体を痙攣させると、今度は

仰向けにされて何度もイッたオマンコにオチンチンが入ってきました。

「もうだめえっ」そんなことを叫びながらまた腰を振りました。オマンコにはオチンチンが入りながら、クリにローターを押し付けられると、イクっぱなしのようになり、何も考えられなくなりました。

「イクぞっ。」

隆様の声とともに結衣のグチヨグチヨのオマンコの中に隆様は放出されました。

そのまままた気を失ってしまった結衣が気がつくと、ベッドには結衣がおもらした跡がありました。「お風呂に入って綺麗にしておいで」隆様にそう言われ、ふらつきながらお風呂に向かいました。

温めのお風呂に浸かっていると、少し身体感覚が戻ってきました。

お風呂が上がると「このまま朝まで続ける？それとも一度外に出る？」

「少し外の空気が吸いたいです」

そう言う「じゃあ準備しなくちゃね」と言われてまたロープを取り出し、結衣の身体を縛り始めました。オマンコにはバイブを入れ、クリにはローターをテープで貼り付けてスカートだけ履き、その上からコートを着ました。

「じゃあ少しドライブしようか」隆様は優しく言い、ホテルを出ました。車が走りだすと、普通の会話をするかのように隆様が話しました。

「結衣は今まで何人くらいとHしてきた？」

「つきあつたのは5人だけど、Hしたのは30人くらいです」

「その人達の中には満足できる人はいなかったの？」

「こんなに気持ちよくなつたのは隆様が初めてです」

「じゃあこれから俺の奴隷になる？」

「はい。是非お願いします」

「少しずつもつと淫乱な奴隷にしてあげる」

「そういえばさつき中出ししたけど、結衣はピル飲んでるの？」

「飲んでないけど、前に2回中絶したら妊娠しない身体になつたから大丈夫です」

そんな会話をしているうちに、ネットカフェに到着しました。店内に入るとすぐに隆様はネットで痴漢募集のサイトに「〇〇にいる結衣です。同じ所にいる人に触ってもらいたいです」と書き込みをしました。

少しすると何人かからレスがありました。その中から一人選んで、店内で待ち合わせをしました。もちろんコートの下はロープで縛られ、バイブもローターも入ったままです。

待ち合わせた場所には結衣が一人で行き、隆様は少し離れた所で見ていました。「こんにちは」小さい声でその人は言いました。

「お願いします」とお尻を突き出すようにして柵のマンガを読むフリをすると、さりげなくお尻を撫でてきました。

お尻にもロープが食い込んでいたので、その人は一瞬躊躇うように手をとめました。そしてソロソロとスカートの中に手を入れてきました。

「マジかよ…」そうつぶやくのが聞こえました。振り返って顔を見ると、ニヤニヤしながら「こんな格好して変態なんだ」と言われました。

その時隆様が近寄って来て、その人に何か耳打ちしてバイブのスイッチを手渡ししました。そして、3人で個室へと向かいました。あまり広くはない部屋に3人で入り、隆様はただ眺めていました。

その痴漢さんはニヤニヤしながら結衣のコートのボタンを一つずつ開けて脱がし、スカートのファスナーを下ろしました。乳首はもうカチカチに硬くなって、オマンコからはオツコが溢れロープを濡らしています。

ローターとバイブを抜かれ、指でクリを刺激されたり、オマンコに指を入れられたり、後ろから隆様におっぱいを揉まれ、声を出さないように必死になっていました。

隆様が「もし入れたかったらいいですよ。ぶちこんでやってください」と痴漢さんに言うと、結衣の脚を持ち上げ、小さい子におしっこをさせるように身体を持ち上げました。

痴漢さんのオチンチンは細めだけど長く、結衣のオマンコの奥を刺激しました。懸命に声を抑えてはいますが、オマンコのグチュグチュという音は個室の外まで聞こえていたと思います。

その痴漢さんはあつという間に結衣のオマンコに放出し、そそくさと部屋を出て行きました。結衣のオマンコからは痴漢さんの精子がドロドロと流れ出てきました。まだ全部出きらないうちに再びバイブがねじ込まれ、ローターも固定されました。

そのままコートとスカートを履き、ネットカフェを出ました。さっきの痴漢さんではイケなかつた結衣を見透かすように「もの足りなかつたんだろう」とバイブのスイッチを入れてくれました。ただしとても弱く。

少しして公園に着き、散歩することになりました。すっかり暗くなつて寒いせいか人の姿はあまりなく、たまにベンチにカップルが座っているくらいでした。隆様と結衣もはた目には長く付き合っている仲の良いカップルに見えたと思います。人目につきにくい所でコートのボタンを開けました。外で裸になるのは初めてだった結衣は、さっきからの弱いバイブの刺激も手伝つて自分からスカートを捲くりあげました。

寒さよりも興奮の方が勝っていました。

「自分でそんな格好して、結衣はホントに調教されたことないのか？」
半分呆れ気味に隆様に言われましたが、そんな隆様のオチンチンを目の前に出されると、貪るように舐めはじめました。

少しづつバイブが強くなり、オチンチンをくわえ込みながらもくぐもつた喘ぎ声が漏れてきました。

「結衣、口の中に出すから全部飲むんだ」と言つとすぐに口の中にたくさん精子を出してくれました。一滴も残さず飲み込むと、「ご褒美にイカせてあげる」とバイブ

のスイッチを入れたまま、ロープからはずし、木に手をつけてバツクからバイブを激しく出し入れされると、あつという間にイッてしまいました。

まだヒクヒクしているオマンコにスイッチを切ったバイブをねじ込み、再びロープで固定して車へと戻りました。

ホテルへと向かう間、助手席の結衣はコートの前は開け、脚はM字に開いてスカートは捲くり上げて座っていました。

たまにバイブのスイッチが入れられると、自分でおっぱいを揉んだりバイブを動かしたりしていた。車の中でイクことは許されず、イキそうになりながらなんとか耐えています。

さつきとは違うホテルに着き、部屋に入るとそこはプチSMルームになっていて、拘束できる椅子が置いてありました。

「さあ、朝までまだたっぷりかわいがってあげるよ」

隆様は結衣のロープを解き、ベッドへと連れて行きました。

調教開始

調教開始

二〇〇八年三月三十一日 投稿

掲載元 官能小説セレクション

(URL: <http://www.kannou.cc/>)

提供 NAN・NET

(URL: <http://www.nantv.com/index1.htm>)

投稿された文章の著作権は、全てNAN・NETに帰属
します。当サイト内の文章、音声等の情報の無断
転載、無断引用は禁止です。情報の転載、引用、
掲載、取材等をご希望の場合は、必ずご一報くだ
さい。上記の要望に対し当社が問題が無いと判断
した場合、他メディアにおいて、投稿された情報が
掲載等される場合があります。

